

イメージと哲学

20世紀フランス思想の映像論

いま、私たちの身の周りには現実と見紛うまでのイメージが数多くありますが、哲学・思想にとってイメージは長らく敵のような存在でした。そんな状況が劇的に変わったのが20世紀後半のフランス思想においてでした。サルトル、メルロ＝ポンティ、バタイユ、ロラン・バルト、フーコー、ドゥルーズをはじめ多くの思想家がイメージ論に取り組み、重要な論考を発表しました。このような変化はなぜ起こったのでしょうか。主要な著作を取り上げて、その背景と、思想の転回を見ていこうと思います。

講 師：澤田 直氏 立教大学文学部教授

講師プロフィール：1959年、東京生まれ。パリ第1大学博士課程修了（哲学博士）。専攻はフランス文学・思想。現在、立教大学文学部教授。
著書に『サルトルのプリズム 二十世紀フランス文学・思想論』（法政大学出版局）、『ジャン＝リュック・ナンシー 分有のエチュード』（白水社）、訳書にサルトル『真理と実存』『言葉』（以上、人文書院）、『イマジネール』（共訳、講談社学術文庫）、ナンシー『自由の経験』（未来社）ほか。

配信日時：12月15日（木）～1月14日（土）

*** 期間限定配信 どなたでもご視聴いただけます。**

- ① <https://commons.muc.meiji.jp/em/638c92192ccae>
- ② <https://commons.muc.meiji.jp/em/638c94ea9489c>
- ③ <https://commons.muc.meiji.jp/em/638c976f409b0>
- ④ <https://commons.muc.meiji.jp/em/638c9483486e3>